OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哲学対話において「発言はしなくてもOK」か？：「人と共に考える場」の問い直し
Author(s)	桂ノ口, 結衣
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 201-227
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72130
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

哲学対話において「発言はしなくても OK」か?

「人と共に考える場」の問い直し

桂ノ口 結衣
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程

要旨

本論は、あらかじめ「発言しなくても OK」とする態度の検討を通し、「人と共に哲学する」場である「哲学対話」の特徴と限界を考察する。

日本の哲学対話では、参加者に対し、あらかじめ「発言しなくても OK」とする態度がしばしば取られてきた。安心させるため、または当人は自分の中で考えているという理由からだ。

だが哲学対話には、発言しないことに対し、単に容認するのでも、発言を強要するのでもなく、問いかけと共に哲学するという選択肢がある。この選択肢の実際を、フランスの哲学プラクティショナー、オスカル・ブルニフィエの哲学対話実践から見る。彼の実践を参照することで、あらかじめ「発言しなくても OK」とする態度は、「人と共に」と「哲学する」のいずれの面でも、マイノリティの不可視化に関する問題を内包していることが分かる。

こうした考察を通じ、本論では、「哲学対話」の特徴は「人やものごとを不可視化せずに問い考える」という点にあると主張する。また「哲学対話」の限界もここにあり、「あえて問わない」というニーズがある場については、先行の他の諸実践を積極的に参照すべきと示唆する。

目次

はじめに
1.「発言しなくても OK」と言ってきたのはなぜか
2.「Stay with Others」の哲学対話
3.「発言しなくても OK」な場でうまれる「哲学」の問題点
4. 哲学対話の特徴と限界

キーワード

哲学プラクティス
発言
マイノリティ
不可視化

はじめに

本論は、日本の「哲学対話」がしばしば参加者に対してとってきた「発言しなくてもOK」とする態度を問い直し、「哲学対話」の特徴と限界を明らかにするものである。

まず語の確認をしておく。本論における「哲学対話」とは、「人と共に哲学する営み」すべてを指す。「哲学する」の説明が必要であるならば、「考える」に言い換えられる。付言するならば、少なくとも筆者にとってそれは、知る(sophy)ことと愛する(philo)こととが繋がりをもつために、より深くより様々な角度から探究しつづけるという類の「考える」である[1]。

「哲学対話」の活動は、本間(2010: 89)が、おもに1998 〜 2004年のヨーロッパにおける在野の哲学者(哲学プラクティショナー)たちによる対話活動を継続的に調査した結果によれば、4つに大別できる。「哲学カウンセリング」、「(ネオ)ソクラティクダイアローグ」、「哲学カフェ」、「子どもの(ための)哲学[以下、P4Cないしp4cと表記]」である。本論で具体的に検討するのは、日本においても比較的普及している「哲学カフェ」並びに「P4C」とし、基礎的に1対1シチュエーションについて考察すべき「哲学カウンセリング」や、手順の決まったワークである「(ネオ)ソクラティクダイアローグ」等については、個別に加えて述べねばならない点が多いため稿を改める。

これまでの日本での調査報告やその後の研究は、基本的に上記4区分に沿ってそれぞれ展開されてきたと言える[2]。「哲学対話」という総称での報告・研究には、もっぱら「哲学カフェ」形式の実践を指すもの(たとえば、村上ほか 2017)や、「P4C」を指すもの(たとえば、中村ほか 2015; 古賀 2017)、また複数の活動形式を参照し発展させた独自のワークショップを指すもの(たとえば、宮田ほか 2017)等が見られる。

本論では、上述のように「哲学カフェ」と「P4C」2つの区分を取り扱うが、あくまで「哲学対話」として論を展開する。もちろん筆者も、区分ごとの実践のもつ特色や差異を均して単一的に問うことには慎重でありたい。実際、「哲学カフェ」と「P4C」の2つに限っても、場の条件や状況、関係者の参加・実施の動機や目的、あるいは成り立ちの文脈等には、大きな異なりがある。しかし、「人と共に哲学する」場であるという根源的な地点から出発し、差異を越えて連帯的に問いたい。具体的な問題はどれ一つとして同じでなくとも、地続きに広がっていて、共に問うていけることを、私たちはフェミニズムから学ぶ。フェミニズムは、歴史の積み重ねと共に、「女性である」という語が孕む無限の差異を尊重しつつ、連帯的に「女性である」という経験を問える地平を耕している。

そのフェミニズムは「個人的なことは政治的なこと」ということばをうんだが、同様に「個々の場のことは政治的なこと」であり得るだろう。本論の問題意識から言えば、たとえば一つの哲学対話の場において「発言しない人」たちにどのように応じるかは、その哲学対話をとりまく社会において「声をあげがたい/きかれがたい人」たちがどのように遇されてきたかということと、無縁ではない。本論が連帯的に問おうとするのは、政治的・社会的な次元の問い直しをも射程に含んでいるためである。

先行研究においても、比較的近年、「哲学対話」に関する連帯的・根源的な問いがあがってきている。梶谷の報告(2018: 119-120)は「哲学対話に哲学の知識は必要か」という問いを提出しているが、これは、学歴差別社会や、研究者の専門性の問い直しにまで繋がるものと見るべきである。木村が提出している「対話という枠組みや、権力性を排除してフラットになったとみなされたもの、それ自体がどういったものであるのか」(2018: 101-102)、「民主主義を望まない者たち、対話を望まない者たち、「われわれ」との対話が困難であるか不可能であると考えられている者たちとどのようなコミュニケーションが可能か」(2018: 104)、「多様な価値観を受け入れるための場のはずが、かえって排除を生んでいないか?」(2018: 107)、「われわれが、われわれの求めるコミュニケーションの在り方を表すのに「哲学対話」という語を使っていることは、どのような意味を持つのか?」(2018: 107)、「どのような人が現状の哲学対話に参加したいと思っているか?」(2018: 108)、「どのような人が現状の哲学対話に参加できる・参加しやすいか?」(2018: 108)、「「哲学対話」とは何のための対話なのか?」(2018: 108)、「[「哲学対話」とは]誰と誰の対話なのか?」(2018: 108)といった一連の問いも、哲学対話を通し、より深い次元を問うている。また高橋(2017: 39)は「哲学対話はどのように/どのようなケア的側面を持ちうるのか」という問いを提出し、論じている。

高橋の論（2017: 39）は「安心、信頼して率直に発言できる関係性があること」と「互いの考えや経験について相互に理解を深め、経験の共通性や統一性を見出し、普遍的な問いの元で探究し、自分の生と照らし合わせ共生共苦すること」が哲学対話に欠かせないことであるとしている。そして哲学対話は、「同じ実存的存在として、ともにこの問いにどう答えていきるのかを考え、主体的に答えていきる」（2017: 39）次元において、スピリチュアルな対話、スピリチュアルケアに接近すると述べている。

高橋の見方に賛同するなら、「発言しなくてもOK」とする哲学対話への疑問は、たとえば以下のかたちで整理することもできる。哲学対話において、「発言しない人」といかに「共生共苦」しうるのか。哲学対話において「発言しない人」は、いかに「同じ実存的存在として、ともに［…］いきる」という次元に開かれるのか。「発言しなくてもOK」とすることは、（スピリチュアル）ケアか。

本論は、「人と共に哲学する」場が「発言しないこと」ないし「発言しない人」にどのように応じてきたのか、そしてどのように応じていくべきかを問う。この問いは、声をあげがたい／聞かれがたい人たちに哲学がどう応じるかという次元にまで深く根ざしている。

これまで「発言しなくてもOK」とする態度がしばしばとられてきたことと、その目的（安心させる）や理由（黙っていても考えている）が、第1節において確認される。だがこうした目的や理由の妥当性が認められるのは、「哲学対話」というよりも、「哲学」や「教育」といった軸においてである。そこで、改めて「哲学対話においては、発言しないことや人に、どのように応じるべきか」という問いが立てられる。

第2節において、フランスの哲学プラクティショナー、オスカル・ブルニフィエの「Stay with Others人と共にいる」を重視した哲学対話が、一つの実例的解として示される。彼の哲学対話においては参加者が発言しないとき、ただ許容するのでなく、発言を強要するのでもなく、発言しないことについて問いかけ哲学するという態度が取られる。こうした方向性に照らして見れば、あらかじめ「発言しなくてもOK」とする態度のもとで、なお「人と共に」ということが実現されていると言えるかには疑問が提される。

続く第3節では、「人と共に」ということが十全でない場合、「哲学する」という点にも問題が生じうると主張する。それは一つには、「哲学対話」において「哲学する」機会ないし態度が放棄される（哲学における問いの不可視化）という矛盾的態度の問題である。またもう一つは、そこで展開される「哲学」が、内容的に「発言しない人」を欠いたり軽視・蔑視を含む他者化したりしうる（哲学における発言しない人の存在の不可視化）という、哲学史的反省と関連した問題である。

こうした議論を通じ、最終節では、「哲学対話」の特徴を、「人やものごとを不可視化せずに問い考える」という点に見る。同時に「哲学対話」の限界もここに見られ、「あえて問わない」というニーズがある場については先行する他の諸実践を参照する必要があることも確認される。

1.「発言しなくてもOK」と言ってきたのはなぜか

日本における「哲学対話」は、「哲学カフェ」にひとつの大きなルーツがある[3]。「哲学カフェ」は、もっぱら成人を対象とし、匿名性を担保したまま参加できる、単発的な哲学対話である。議論文化が土壌として無い日本の「哲学カフェ」では、多くの場合、発言することが必須とはされてこなかった[4]。

日本で「哲学カフェ」を最初期に始めた大阪大学臨床哲学研究室のあゆみを振り返った『ドキュメント臨床哲学』からは、関係者達が哲学カフェをどのように位置づけ、着手していったかが読み取れる。そのなかに、発言に関する記述がある。

> 発言することだけが参加ではない。発言しなくても参加者は考えている――「ずっと話を聴きながら、こんなに一生懸命に考えたことはめったにありません」というのがしばしば出される感想だ。（本間・中岡 2010: 107）

また、アカデミズムからは距離をおいた市民団体として、多くの哲学カフェを長らく展開してきた市民団体カフェフィロの『哲学カフェのつくりかた』にも、発言に関してこのような記述がある。

［…］発言しない人にもっと発言を振るべきだ、という参加者の声をしばしば耳にしますが、無理に指名したり、発言を順に回したりする必要はありません。発言はしないけれども、最後まで頭をフル回転させて考えながら議論を聴いていたという参加者は多くいます。（カフェフィロ編 2014: x ix）

いずれの引用からも、発言していなくてもその当人は「考えている」という点を尊重し、「発言しない」という態度選択を肯定してきたことが分かる。

さらに、「哲学カフェ」から少し遅れて日本に導入された[5]「P4C」についても見てみよう。「哲学カフェ」とは異なり、もっぱら子どもを対象とし、学校など日ごろの関係性もある（ある意味閉鎖的な）場で継続的に行われることの多い「P4C」においても、発言することは必須とされてきていない。

主に学校でのP4Cに取り組む教育関係者たちのネットワークであるP4Cjapanは、P4Cを以下のように説明している。

話すことが参加のすべてではありません。哲学の輪の中でクラスの友達の意見を聞きながら、じっくりと考えを巡らせることは、もしかしたら話すことよりもずっと大切なことなのかもしれないのです。（P4Cjapanwebサイト）

また、学校という場に限らず、P4Cをワークショップ的に各地で展開している特定非営利活動法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダが対話のルールについて述べている箇所でも「何も言わない」ことについて触れられている。

ひとが話しているときはきく／相手が考えているときは待つ／自分の思ったことを言う／ひとの嫌がることをしない／何も言わなくてもいい
こうしたルールを守ることで、「ちゃんと聞いてもらえる」「ゆっくり考えても待ってもらえる」「何を言っても怒られない」「ひどいことをされない」「何も言わなくても怒られない」という安心感を得ることができ、考えることの楽しさを感じられるようになります。（川辺 2018: 14-15）

これらの引用からは、発言を強要されることなく場にいられるという、安心感が重視されていることが読み取れる。

いま筆者は、ここまで「哲学カフェ」に関する記述で見たような、活発に「発言する」ことだけが「考えている」「哲学する」ことではないとする立場に賛同できる。確かに、人は黙っていても「考える」あるいは「哲学する」ことが可能である。

また、「P4C」に関する記述から見てとれたような、発言を強要しないという態度表明にも頷ける。日本社会は、1994年に児童の権利に関する条約を批准しているが、いまだ子どもに対して大人が過剰なパワーをもちコントロールすることに寛容な面がある[6]。さらに、学校では、子ども同士の関係の中に、スクールカーストのようなパワーとコントロールの不均衡が存在する[7]。このような社会や学校文化の背景が現にある以上、対話の際に一部の人がパワーとコントロールを握って／握り続けてしまう危険性は確かにある。したがって「発言」を規範化しないことは、監視・介入する必要性をあらかじめ低くし、規範逸脱への攻撃や規範遵守への嘲りをさせないための手段として適切であると思う。児童生徒にとって教室とは、対話の場であるよりもまず日々の生活を送る場であることに鑑みれば、すこしでも安心して時間を過ごせることが重要であるのは言うまでもない。

このように、発言を必須としないことにも一定の妥当性がある。だが、この妥当性とは、「人と共に哲学するという営み」としてではなく、「哲学という学」や「学校運営・生活という営み」として捉えることで成立しているものではないか。（いま筆者自身が賛同したのも、まさにこうした主軸においてであった。）「哲学対話」は「人と、共に、哲学する」営みであるという原点を、深く考える必要がある。

私たちは、「発言しない人」と「共に」哲学する手だてを、本当にもっているのだろうか。尊重し待っているつもりで、実際には単に放置していないか。立場を逆転させてもよい。私たちは「発言しない人」であり続けるとき、それでも「人と、共に」哲学しているだろうか。目の前の人達を、まるで自分の関心に一方的に合わせて聞いたり聞かなかったりできるラジオのように楽しんではいないか。

それではこうした疑義が提出される以上、哲学対話において発言は必須のも

のとして、全員に強要されるべきなのか。そうではない。人が完璧な存在ではない（「人と共に哲学すること」を目指して集いながらもそれができない様々な瞬間は必ずあり得る）以上、「哲学対話では全員が発言すべきなのか、しなくてもよいのか」といった類の問いは、そもそも立て方がおかしい。問いは、「哲学対話でも、誰かが発言していないという事態は生じうる。その時、どのように応じるべきか」である。そして解として哲学対話は、「発言しないことを（あらかじめ）容認する」のでも、「発言することを強要する」のでもなく、「発言しないことについて問いかけ哲学する」という選択肢を本来的にもつ。フランスの哲学プラクティショナー、オスカル・ブルニフィエ［以下、本人がプラクティショナー名として用いる「オスカル」と表記］は、まさにそのような哲学対話を行う。次節で、筆者が経験した、オスカルによる1週間の哲学プラクティス国際セミナー（2016年2月、フランス）を報告する。

2.「Stay with Others」の哲学対話

世界各地各所で哲学プラクティス[8]を続けるオスカルは、哲学対話進行において、参加者全員が、彼の言い方を用いれば「Stay with Others人と共にいる」ができているかどうかに注意を払う。哲学対話の場において参加者は、複数の人と共にいる。それにも関わらず、相互作用から浮遊した位置にいるかのような（つまり一人でいる気になっている）人や場面があった場合、オスカルはそれに関心を示し、問いをもって関与するのである。

本節で報告する哲学プラクティス国際セミナー（2016年2月、フランス）の参加者は約25人（中途参加者・中途退出者含む）。多様な国・地域から来ており、年代も10～60代程度と幅広い。職業も様々であるが、教職や心理職は複数いた。ジェンダー比は女性：男性が4：1程度。共通言語として英語を用いた。この国際セミナーでのオスカルの関心・態度について、例を挙げる。

オスカルの進行では、誰かの発言のあと、その発言が「分かったか／分からないか」を全員に対して問い、挙手で確認する。その確認の際、オスカルはまず唯一分かったとも分からないとも挙手しなかったアノ（仮名）に着目し、「私たちは常にStart with Minorityするべきだ。それは大抵、今Stay with Othersが難しい人でもある」と説明した。オスカルに「今ぼんやりしている？」と尋ねられたアノは、ぼんやりしていたことを認めた。オスカルは、「それって、君はいま、自分の頭のなかのカウチで一人で考えていたってこと？」と、大げさにリラックスした様子でおどけながら続けて訊く[9]。アノは、みんなと一緒にその様子に笑いながら、「イエス」と答えた。オスカルは、「どうしてその頭の中から出てきて、私たちと一緒にいないのか？」とさらに尋ねた。「人と一緒に考えること（哲学対話）がしたくてこの場にいるはずなのに、今ついぼんやりしていたアノ」から出発して／と共に、そこから「人が、人と一緒に考えられないのはなぜか」について探究[10]が行われた。それは完璧主義や、他者への信頼についての対話へと繋がっていった[11]。目の前にいる人への問いかけは、単なる確認にとどまらず、十分に哲学対話へと発展しうる。

別の時、筆者自身がみんなの発言を黙って聞いてだけいると、オスカルから「ここで一緒に考えることには参加しない。けれども聞いてはいるというなら、他の人にとっては君に盗み聞きされているということになるのでは？」という質問がきて、まごつきながらもYESと答えた。続けて「君は盗み聞きする人のことを、cheater（ずるい人）だと思わないか？」と、cheetah（ネコ科のチーター）のモノマネ付きで問われ、はっとした。

自分自身を「～する人（盗み聞きする人）」や「～である人（cheater）」と捉えるこの視点は、場にいる他者の視点[12]である。この視点を得ることで、先ほどまで筆者が「みんな」と見なしていたものが、実際には場の他者たちだけを指しており自分は差し引いたもの、つまり「みんな（マイナス）－筆者」であったことに気づいたのである。

また、こうした視点移動が可能となると、自分自身を特別と捉える態度を留保できるために、参加者間の対等性が回復する[13]。筆者は、場の他者たちの発言であればどんなものであれ、探究に貢献する興味深いものと感じていた。特別性を留保し、他者と対等な次元の存在として自分自身を認められるとき、他者に認めていた発言の貢献性を、自分自身においてもまた同様に認められたのである。

cheaterは、場で考える人たちの意見を搾取するだけでなく、場で考える人たちからcheater自身の貢献性ある意見を奪ってもいる。こうした気づきから、筆

者は続くオスカルからの「君はcheaterでいたいか？」との問いに、NOと答えた。オスカルは、「Share yourself. Enjoy who you are !」と声をかけた。参加者の誰もがcheaterであることに甘んじず、その人なりの考えを共有することで、「Stay with Others：人と共にいること」と「哲学対話：人と共に哲学すること」は同時に成立する。

オスカルの進行ではまた、「発言しない人」だけでなく、「問いかけない人」に問いが向けられたこともある。たとえば、持論があり勢いよく自分の意見を話し出そうとしたユアナ（仮名）に対し、「君はソフィー（仮名）が今まだ前の発言を『分かった』と言っていないことに気づいたか？」「ソフィーの考えに関心がないのか？」「君には今何が起きているのか？」等とオスカルは尋ねた。ほかに、確認されない推論を積み重ねることも、共にいる人に「問いかけない」態度の一つとして問題視された。たとえばスカーレット（仮名）が、そこまでの議論からマヌ（仮名）の立場を推論した意見を述べたときに、オスカルは「推論している時には頭の中のマヌのillusionと共に考えはいても、目の前のマヌと共には考えていないのでは？」「なぜ一旦その推論の妥当性について、マヌを含むみんなで吟味しないのか？」と問題提起し、話し合ったりした。

「発言しない人」は確かにしばしば、その人自身が「Stay with Others」に何らかの困難を抱えているのだが、それだけではない。共にいる人たちの側もまた、しばしば「発言しない人」とのStay withに困難を抱えているのである。場にある問題は、場にいるすべての人にとっての問題だ。そして問題を問いにすることproblematizeから、哲学は始まるのである。

ここまでのオスカルの哲学対話を通し、「哲学対話では『発言しない人』ないし『発言しないこと』にいかに応じるべきか」という問いについては、「発言しないことについて問いかけ哲学するべき」との解をひとまず答えられるだろう。

発言の有無は、「Stay with Others」の可否、ひいては「人と共に」哲学することの可否と常に結びついているからこそ問われ、重視される必要がある。「人と共に哲学する」というのは、場に人が集いさえすれば自動的にあるいは運次第で達成されるような、抽象理念ではない。目の前にいる人ひとりひとりと共に存在し、互いの考えや価値観や世界観を分かち合う地道な作業があって、はじめて実現する営みである。「Stay with Others」とは、「人と共に」哲学するという、哲学対話の本質的前提を蔑ろにしないための指針であると考えられる。この指針のもとでは、参加者の発言は、必ず資するところあるものと理解される。「発言すること」は、それが新奇性をもっているだとか的を射ているだとかいった発言の内容に先だち、「共に存在すること」や「互いの考えを共有すること」を可能にする手だてであるという点で、「人と共にする哲学」にとってかけがえなく重要なものなのだ。

あらかじめ「発言しなくてもOK」とする主張は、安心して人と共に哲学することを目指して提出されていた。だが、終始「Stay with Others」に細心の注意を払うオスカルの方向性に照らして見れば、本質的に重要であるはずの「人と共に」ということの質をあらかじめ落とすことでそれを容易にしている面があるのではないか。それでもかまわない、とする向きもあろう。だが「人と共に」という点を損なうことは、「哲学する」という点にも、歓迎しがたい二つの大きな影響を及ぼすように思われる。次節において検討する。

3.「発言しなくてもOK」な場でうまれる「哲学」の問題点

前節では、オスカルの哲学対話について、発言の有無を、「哲学対話」の本質的前提である、人と共にいることや人と考えを共有すること（Stay with Others）から捉える実践として報告した。また、これに照らして、あらかじめ「発言しなくてもOK」と主張する態度を見た場合、そこでの哲学対話実践は「人と共に」という点が不十分である可能性を指摘した。

本節ではさらに、「人と共に」ということ（の質）を重視しない「哲学対話」では、「哲学すること」にも以下二つの問題を抱えうると主張する。「哲学における問いの不可視化」ならびに「哲学における発言しない人の存在の不可視化」という問題である。

あらかじめ「発言しなくてもOK」とする態度は、一つひとつの「発言しないこと」がもつ意味や理由、関連する問題についての「問いを不可視化」させる。誰かが発言しないでいるときには、一人思索に耽っているのか単にぼんやりしているのかさえも私たちには分からないのであり、したがって哲学対話では問うことができる。分かった気になっているものごとの分からなさにいちいち立

ち止まり、その根拠や本質の探究へと向かう姿勢は、ソクラテス以来の「哲学」の伝統的姿勢である。

しかし、私たちはしばしば「…知らないことを他人だけでなくじぶんに対しても隠そうとする。本人にとってもけっしていいことにはならないのに、そのような自己欺瞞をわたしたちは演じてしまう」(高橋・本間 2018: 30)。あらかじめ「許容された態度」という色眼鏡をかけることは、自らの無知への感受性を損なうだろう（そもそも問いがあることに気づかない）。あるいは自らの無知をも許容し、「隠そうと」してしまうことだろう（問いに気づいても、なかったことにする）。いずれにせよ、場から哲学の機会を減じてしまう可能性がそこにはある。厳しく言えば、あらかじめ「発言しなくてもOK」とする態度は、「哲学」対話において「哲学する」機会や態度をあらかじめいくらか放棄する態度である。

ここで、もしかすると「発言しない人にまつわる問いから哲学するよりも、テーマとして設定された概念や命題について哲学探究することの方がより重要では？」との問いがあるかもしれない[14]。この点は、第二の機能、「発言しない人の存在の不可視化」と関連している。

繰り返し確認すれば、哲学対話は、単に各人の探究が「進む」ことではなく、探究を「人と共に進める」ことを目指す場である。「発言しない人」がどのような状態にある人か問われず確認されぬのに、そこが変わらず「人と共に哲学する」場と見なされるならば、「発言しない人」は、実質的にマイナスされている。哲学を「共に」するメンバーからマイナスされているのであるが、それだけでなく「人」と見なす対象からもマイナスされている可能性がある。

「哲学」は（ほかの多くの「学」と同様）、歴史的に「発言できた人」の手で、「発言できた人」をこそ「人」と見なして練り上げられてきた。男性でない、白人でない、ヨーロッパに住んでいない、成人でない等、暗黙の基準に照らされたとき差し引かれる者たちは、長らく“正規の”「哲学者」とは見なされず、また“正規の”「哲学」が論じる内容には含まれずに、存在を無視されたり、蔑視・軽視を含む他者化されたりしてきた。「哲学対話」は、こうした哲学史的反省と全く無縁なところにはないと、筆者は考える。

ここで前節冒頭のアノに対するオスカルのアプローチを再び参照しておけば、「発言しない人」や「発言しないこと」に着目し問うていく姿勢は、「Start with Minority」の重要性から取られたものであった。議論では一般に、賛否が問われた場合、賛否いずれでもない者については検討されなかったり、例外扱いせざるをえなくなったりする。「分かったとも分からないとも挙手しなかった」(≒「発言しなかった」)アノは、「Stay with Others」に何らかの困難を抱えている「少数派」であり、にもかかわらず／かつ議論から「差し引かれ」うるという、少なくとも二重の意味でマイノリティであった。上述の、しばしば「哲学者」や「哲学」からマイナスされる立場である。「Start with Minority」と明言し、その姿勢を徹底することで、最も差し引かれがちな立場にいる者のもつ問いや問題はやっと、関心をもたれ、共有され、探究される。

哲学対話において、「発言しない人」へ問いかける必要性を軽視することは、特定の「哲学者」を排除し、「哲学」にひそかな差別性を堅持してきた歴史の反復となりうる。「発言しない人にまつわる問い」についての探究がなおざりにされたままなされる概念や命題についての哲学的探究は、その「哲学」に重大な取りこぼしが生じうるのである。

ベル・フックス(2017)の指摘したフェミニズム(とくにその第二波の運動)の問題を、類似の構図として参照できるだろう。フェミニスト達は「一般大衆を基盤にしたフェミニズム運動」をつくりあげる必要性を口にしていたが、実際の運動は「狭い土台の上に形づくられてきたというだけではなく、何よりもまず特権階級（そのほとんどが白人）の女性に関する問題にしか注意を呼び起こさなかった」(2017: 12、強調点筆者)。理論についても、「多くのフェミニズム理論は中心に生きる特権階級の女性によって著され…視点に、周辺に生きる女性や男性の生活に対する認識があったり、配慮がなされていたりすることはほとんどな」(2017: 16-17)かった。「結果として、フェミニズム理論は全体性に欠け、さまざまな人間の経験を包括した幅広い分析に欠け」(2017: 17)ることとなってしまった。ここからフックスは、周辺と中心の双方から、双方に向かって発信されるフェミニズムの必要性を主張し、また実際にそうした理論を構築している。

「女性」の問題に取り組む実践や理論が、実際には「特権階級の女性」という限定をもっていたことがあるように、「人」一般誰しもに門戸を開いているかのような現代における哲学の実践や理論が、実際にはやはり社会の中心部にいる者

に限定されていることはあり得るのだ。哲学対話も、フェミニズム同様、真摯な自己批判とともに歩んでゆくべきだろう。フックスがフェミニズムについて述べる以下の主張は、哲学対話にも当てはまる。

> わたしたちの人生が固定したものでも静止したものでもなく、いつも変化しているように、わたしたちの理論は新しい情報に対して、流動的で、オープンで、そして敏感であり続けなければならない。(フックス 2017: 13)

この「発言しなくてもOK」という態度の内包する「発言しない人の不可視化」の問題は、これまでほとんど論じられてこなかった。だが、極めて重要な点であるから、さらに慎重に確認しておきたい。「発言しない人」の状態を問いかけて確認せずとも、「発言しない人」への関心を払ってさえいれば[15]、その人をマイナス一せず共に哲学している、と言えるのだろうか。

当人の応答を求めず関心を払うとき、しばしば人が行うのは、一方的・非対称的な推論である。オスカルは推論について、「推論している時には頭の中のillusionと共に考えはいても、目の前のその人と共には考えていないのでは」と問題提起していた。illusionを眼前の人と同一視することが起きているとすれば、オスカルが述べたように、端的に「人と共に哲学する」ことに失敗しているという難点もある。だが、ここにある問題はそれだけではないと筆者には思われる。

「illusionを眼前の人と同一視する」ことは、「眼前の人をillusion化する」ことを同時に生じさせている。歴史的に見た時、この同時並行する動きは、蔑視・軽視を含む他者化へ繋がる危険性を孕んでいることが分かる。ポストコロニアルに関するさまざまな論考が参考にできるだろうが、オスカルの言葉に沿って特にillusionという観点を取れば、たとえば19世紀に起きたバレエダンサーの位置づけの変遷が想起される。

鈴木(2012)によれば、19世紀のいわゆるロマンティック・バレエにおいて、爪先立ちするポアント技法が、女性ダンサーが必ず身につけるべき(一方男性にはふさわしくないとされる)基本技術とされた。ポアント技法が活用されるロマンティック・バレエの大まかな特徴は、「エグゾティスム(舞台は必ず遠い異国)、妖精あるいはそれに類する存在の登場、現実と非現実の対比(主人公は現世と彼岸の境界を越える)、そしてストーリーがかなりの重要性をもつ、ということ」(鈴木 2012: 52)で、「主人公はほぼ例外なく女性」(鈴木 2012: 55)であることもそれ以前との大きな変化である。こうした技法の発生や変化は、観客の変化とも関係がある。この時期、「王侯貴族に替わって新興ブルジョワジーの男性が観客の中心となるにつれ…『男の眼差し(male gaze)』が形成された…」(鈴木 2012: 55)のだ。すなわち、ロマンティック・バレエは、舞台上の女性を、観客と地続きの世界に生きる者ではないかのようにする装置(爪先立ちは重力をも感じさせない)を整え、illusion化したと言えるだろう。そして熊谷が述べているように、このマラルメ言うところの「…[見る者の]想像力にかかわるジャンル」(熊谷 2012: 88)としてのバレエは、「舞台の裏で、売春が交渉されるような場」(熊谷 2012: 73)「売春と結びついたスペクタクル」(熊谷 2012: 88)とされた。バレエダンサーは、目の前にいながら、関係性を耕していく相手(人)ではなく、illusion化されたからこそ購入さえ可能な存在として扱われた。

今見たのは、人のillusion化が蔑視・軽視を含む他者化に繋がるという、一つの例である。もちろん「推論すること」がオスカルの言うように「illusionと共に考えること」だとしても、この例から即座に推論することそのものを危険視すべきというわけではない。だが、現代社会の中で軽視・蔑視され不可視化されがちな人たちと、歴史的に「哲学」が当人には問わず確認せずに論を重ねてきた人たち、そして目の前の「哲学対話」において問わず確認せずともケアできていると見なされる「発言しない人」たちは、重なりを持っていないだろうか。illusionと共に考えることを以て「人と共に考える」場が成立していると見なせるのか、また見なしてよいのか。こうした問いの考察[16]ぬきに、ただ関心が保たれていることを以て「人と共に哲学する」ことの成立を見るべきでないだろうというのが、筆者の立場である[17]。

本節では、哲学対話であらかじめ「発言しなくてもOK」と容認することは、みすみすいくつかの哲学する機会ならびに態度を放棄する(哲学における問いの不可視化)という矛盾的態度の問題を孕み、またそこで展開される哲学が、内容的に「発言しない人」を欠いたり軽視・蔑視を含む他者化したりして成立しうる(哲学における発言しない人の存在の不可視化)という問題点をもつことを明らかにした。

4. 哲学対話の特徴と限界

前節までで、「哲学対話」であらかじめ「発言しなくてもOK」とする態度には、「人と共に」という点にも「哲学する」という点にも問題のあることが示唆された。それは、重要でありながらもこれまであまり焦点の当てられてこなかった、「哲学対話」と不可視化の問題である。実践そのもののなかでこうした問題に取り組む事例としてオスカルの哲学対話を眺めれば、「哲学対話」はむしろ、「発言しない人」も含め場の誰も不可視化せず、「発言しないこと」も含め場に存在する問いを真摯に取り扱う態度こそを、重要な特徴として持つものだと言えるのではないか。

日常生活は、「普通」や「当たり前」によって、いちいち立ち止まらずにすむことで成立している。こうした面は多かれ少なかれ必要に違いない。だが、その裏側に、置いていかれる問いがあり、置いていかれる人がいる。自閉スペクトラム症当事者である綾屋（2012）は、かつての自身の経験について、以下のように述べている。

> いままでお母さん［綾屋自身を指す］は、人よりできなかったり、集団に追いつけなくておいてけぼりになったりしているときに、誰かに「助けて」って言ったことがあったでしょうか。いいえ、ありません。古井戸の底で独りぼっちでそう思っていただけです。だってお母さんが助けてほしいことって、どれもこれも「それは誰もが普通にわかっていること」「自分一人でできて当たり前」とされていることばかりなんですもの。みんなが楽しそうに笑っているときに、「いまの話、どこがおもしろかったのかわからないんだけど教えてくれる？」なんてまわりをしらけさせるようなことを毎回毎回、怖くてとても聞けないでしょう？（綾屋 2012: 243-244）

日常生活では一般に、「普通」や「当たり前」として通用しているものが、本当に場の全員に共有されているものであるかどうか、問われて確かめられることがない。綾屋の場合は、こうした分からなさやできなさを自らの「弱さ」として認め、自分から人とのつながりのなかで明るみに出し、助けてもらう生き方を少しずつ始めたとして、こう書いている。

> ［…問題がすべて解決したわけではないが］「私、いい場所にきたなぁ」としみじみ思う気持ちはあります。自分の弱さの世界に孤独に閉じ込められているのではなく、弱いままで他者に開かれていく世界にたどりついた気がするからです。（綾屋 2012: 260）

弱さを独りぼっちで抱え込む「古井戸の底」から「弱いままで他者に開かれていく世界」へ。「哲学対話」もまた、この「弱いままで他者に開かれていく」ことの、共同探究あるいは共同試行の場として捉えることが可能だろう。オスカルのいう「Start with Minority」は、「弱さ」から出発する姿勢だとも言える。日常生活においては難しくても、少なくとも「哲学対話」では、人と共に、哲学ができる。つまり、人と共に、ささいなふるまいのひとつ、あたり前に使えるはずの言葉の意味ひとつ、それらの分からなさや根拠にいちいち立ち止まり、愛をもって吟味し、何度でも知り直してゆくことができる。しばしば「発言しない」というかたちを取って現れる「弱さ」あるいは「Minority」は常に、哲学対話の端緒となる。だからこそ、哲学対話においては自らや場を共にする人のもつ「弱さ」に対するアンテナをたて、可視化して共に考えることを、大切にすることができる。あるいは、一歩進めてこうも言えるだろう。「人やものごとを不可視化せずに問い考えたい」、「弱さやMinorityから出発したい」というニーズに対して「哲学対話」は実践し得る、と。

いずれにせよ重要なのは、場のニーズを見きわめ、それによりよく応じられる実践をすること、またそうした実践に資する理論を提示することだ。もし「哲学対話」がこのように、本来的には発言しない人や発言しないということから出発できる営みであることには賛同できるにも関わらず、なおもあらかじめ「発言しなくてもOK」とする必要性が感じられるとすれば、場のニーズ（ひいてはどのような実践をするか）を問い直し、見つめ返す必要があろう。

たとえば、あらかじめ「発言しなくてもOK」とする理由が、あらかじめ参加者の外傷的経験を知ってのことである場合には、それでも今の局面で行いたいのが、「人と共に哲学すること」であるのかどうかをよく考えねばならない。もっ

ぱら「人と共にいたり語ったりすることを通じて、回復や変化をはかる」というニーズに応えようと積み重ねられてきた営みは、既に多くある。

外傷的経験などの問題に関する当事者同士の語り合いの場は、そうしたひとつである。問題当事者同士の語り合いの場ではしばしば、個人の「発言しない」という状態や選択をOKとし、そのまま受容することも重視されてきた。それは、問題によってそのひとの本来もつパワーが発揮できないことへの共感的理解に支えられた受容である。対話の内外を問わず、発言しない人も場に参加した実感をもちやすくなる様々な工夫がこらされていることも多い[18]。

フェミニストカウンセリングに関する、ある問題の語り合いグループに参加していた当事者は、そのグループでの初期の経験について「[…]『自分のことは言えない』『人のことも聞けない』ような緊張した状態がずっと続いた」(フェミニストカウンセリング堺 2001: 233)と語っている。話せない(ときには聞けもしない)状態でも、「場に受けとめられた」「場に居場所があった」と感じられる経験が、また次の回への参加へと繋がっていくことは、実際にあるものだ。そして参加の積み重ねの中で、場だけでなく社会に居場所をもつ可能性に、賭けるちからを蓄えていくのである。こうした問題当事者同士の語り合いの場と哲学対話の間には異同がさまざまあり得る[19]。だからこそ、使い分けたり取り入れたりすることで、場のニーズにより応じられるようになるだろう。

また、あらかじめ「発言しなくてもOK」とする理由が、(たとえば成績評価のある必須授業に組み込まれた「哲学対話」である等)参加者が哲学対話をする動機の乏しさにあるならば、その場合も、この時点でそれでも場で「人と共に哲学する」必要があるのかどうかが問われてよい。「人と共に考えるというのも、いいかもな」「この場でなされることならば、ともかく参加してみて大丈夫だろう」等、参加への動機を耕していくことに重心を置くのであれば、参照できる先行実践や研究は「哲学対話」に留まらず多くあろう。

たとえば「動機付け」を丁寧に行う必要のある、犯罪・非行臨床の知見から学ぶことができる。以下で述べられる「一般臨床と犯罪・非行臨床の違い」は、「任意参加の哲学対話と半強制/強制参加の哲学対話(参加必須の授業等)の違い」を考える際、示唆に富むように思われる[20]。

> […]犯罪・非行臨床では対象者が自発的に治療を求めることは普通はなく、[…]場へと強制的に引き出される […]。たいていは治療教育する側が社会的権威・権力を背景にし、治療教育を受ける者の今後についての決定に関与できる立場にあることもあって、必ずしも明確に反抗的、拒否的態度を示しはしないものの、それまでの体験から権威への反発や不信感があることが多いし、非難を避けて自分を守ろうとの防衛も作用し、一般に警戒的で働きかけへの抵抗は強い。中には、その場をうまく取り繕って表面的にやりすごしたり、治療者に迎合的な姿勢を見せつつ、できれば自分に有利なようにことを運び、治療者に都合よく動いてもらうために操作しようとしたりする者もいる。(藤岡 2007: 214-215)

参加者の哲学対話に対する動機の乏しさが認知できているにも関わらず何らかの事情で「哲学対話」を行おうとしている場合、行おうとできる側は、引用の治療教育者のように「社会的権威・権力を背景にし、治療教育を受ける者の今後についての決定に関与できる立場」にあり得ることが、改めて確認できるだろう。「哲学対話」の場自体は、対等な関係性であることが目指されるとしても、そもそもその場を無理の生じるかたちで実現させられる自分の立場性は十分自覚されねばならない。また、哲学対話の参加者が、引用の「治療教育を受ける者」に類似する態度を取ってしまうケースも想定できる。

そこで犯罪・非行臨床の場合には、本人の中にある「変化への動機」を見出し引き出して治療を可能としていくために、真っ向からの議論や説得は避け、対象者の考えや感情を傾聴するという。

> 対象者に真っ向から対決して議論したり、道理を説いて説得にかかったりすることは得策でない。そうした対応はますます対象者の抵抗を強めるばかりでなく、対象者との主導権争いやパワーゲームに巻き込まれ、対象者に治療教育への反発を正当化する理由を与え、治療構造を破壊するからである。結局のところ自分を変えるか変えないかを決めるのは対象者自身であり、問題となっている行動をめぐる対象者の考えや感情に耳を傾け、本人の中にある変化への動機を見出し、それを引き出していくことが適切で

ある。(藤岡 2007: 215)

これを参照するならば、参加者の参加への動機が乏しい局面での「哲学対話」でも、「参加すること」や「人と共に哲学する」ことについて、真っ向からの議論は避ける必要があるのでないかとの疑問が浮かぶ。本論で見てきたような「哲学対話」がまさに不適切なものとなる可能性さえあるとすれば、それでもなぜ「哲学対話」と呼び実践したいのかが、まずは吟味されてしかるべきだろう。

本論では、これまで着目されてこなかった「発言しなくてもOK」という態度の検討を通じ、人やものごとを不可視化せずに問い考える点に「哲学対話」の特徴を見た。「哲学対話」の限界も同時にここにあり、「あえて問わない」というニーズがある場については、必ずしも「哲学対話」として実践する必要がないのではないかという点も示唆しておいた。今後、「哲学対話」は実践的にも理論的にも、よりいっそう、さまざまな実践や理論との接続をはかっていくことになるだろう。なお今回、哲学対話における「発言」への着目が、ロゴス中心主義とは別の方向性として解されるべきとの主張を取りこぼした。この点については、紙幅の関係もあり、稿を改めたい。

「哲学対話」での「発言はしなくてもOK」という声が、「黙っていても考えていると見なせる」という理由からでも「発言が強制されないことに安心してほしい」という目的からでもなく、「発言しない誰をも、哲学対話は置いていかない」という信頼から発される日はくるだろうか。本論が確立した主張として読み解かれるのでなく、誰かと共に哲学し始める端緒となれば幸いである。

注

1 高橋・本間 (2018: 314-316)は、フィロソフィにとって重要なのは、論理的思考、批判的思考という意味での「考える」ではなく、「気づくこと、注意すること、ケアすること」「知ること、愛すること、関係することがともに動き出す実践」だと述べている。筆者は「フィロソフィ」ではなく「考える」という語を以降も用いるが、基本的に彼女らの主張に賛同しており、単なる論理的・批判的思考をもって「考える」と見なしているわけではない。

2 「哲学カウンセリング」については、中岡 (1999)、会沢 (2001)、本間 (2000A)において当時の調査結果が報告されており、その後の研究としてはたとえば松田 (2003)や水野 (2003)ほか文献をもとにした研究が散見される。

「(ネオ)ソクラティクダイアローグ[以下、NSD]については、堀江(1999)や、本間(1999)等で当時の調査報告が読める。その後の研究としては、たとえば服部 (2012)ほか。またNSDとは異なるワークであるが、同様に手順の決まっている哲学対話として、ハーテロー(2014)「哲学ウォーク」がある。

「哲学カフェ」については、当時の調査報告として現在も文書で確認できるものは意外と少なく、管見の限りでは本間(2004)と本間(2006A)。おそらく既に、哲学カフェ第一人者であるマルク・ソーテの『ソクラテスのカフェ』が刊行されていたことも関係あるだろう。その後の展開としては、実践に基づいての報告多数 (たとえば加藤ほか (2015))。また、ほかの対話形式との比較論文等も見られる(たとえば五十嵐(2016))。

「P4C」については、たとえば国際学会を通じての当時の報告は寺田(1999)。また現地調査としては本間 (2006B)。その後の展開としては、教育という文脈での報告や論考多数 (たとえば土屋(2018)や永井ほか(2018))。

なお、実践においては、一人のプラクティショナーが複数の区分にまたがって取り組むことは一般的である。

3 2000年秋、大阪大学臨床哲学研究室が「哲学カフェ」を大阪市で初めて試みた。それ以前にもマルク・ソーテが来日して哲学カフェを開いたことがあったようだが(カフェフィロ編『哲学カフェのつくりかた』、大阪大学出版会、2014、viii)、当時参照できる宛先としては国内になく、彼らが手さぐりで始めていった様子がたとえば本間(2000)等から読み取れる。

4 文章で確認できるものとして、たとえば高校生による高校生のための哲学カフェ『ありとぶら』「黙っていていい。(対話のルール)」、。『めぐろ哲学カフェ』「発言しなくてもOK ！聴いているだけでも考えていただければ大丈夫。」、。『哲学カフェ inとよなか国際交流センター：うけとめるってなんだろう？』「発言するもしないも自由です。気軽にご参加ください。」、等。

5 臨床哲学のメンバーが、大阪教育大学の教授たちと共同でP4Cに関する研究会を開催したのが2004年、その後実際に教室で対話する活動を始めたとされている。本間・中岡 (2010: 105)

6 たとえば荻上・内田(2018)参照。

7 鈴木 (2010)によれば、スクールカーストとは「教室内の生徒の「人気」の高低を要因として、生徒の人間関係に序列構造を生み出し、それが教室内の生徒間で共有されることによって、明確な「身分の差」となって現れる現象」のこと。また石田(2017)ほかによれば、もっぱら、児童生徒個人単位の「人気」や「地位」ではなく、学級内の友人グループの存在を前提とし、そのグループ間の序列や階層が問題とされる点が欧米のスクールカーストとは異なる。

8 哲学対話のことであるが、大学等の研究機関に所属せず、みずから開業して哲学対話を行っているというニュアンスを落とさないため、ここでは「哲学プラクティス」と表記した。

9 オスカルはこうしたユーモアを携えているため、実際にはかなりシビアなことが問われていても、場の雰囲気は柔らかい。とはいえ、やはりシビアな問答であるので、問われた人が怒りだしたり泣きだしたりする時もある。

10　たとえばここで立てる問いを「人が、人と共に考えられない時、どのような理由があるか」ではなく、いったん「私が、人と共に考えられない時、どのような理由があるか」とするならば、探究は当事者研究と接近していくだろう。

11　ある人の態度やことばから、どのようなコンセプトが見出せるか、それは一般化できるか等については、水谷（2018）によるオスカル派哲学プラクティショナー、ヴィクトリア・チェルネンコ氏とのセルフ・コンサルテーションについての報告を参照。

12　今回は紙幅の都合で省略するが、すでに報告されているように、オスカルの進行ではしばしば「他の人に、君が今どう見えるか聞いてみよう」と促したり、「他の人は今、君についてどう思っていると思う？」と推論し、その後実際に周りの人たちにどう思っているかを言ってもらい、推論と実態のズレや一致を確認したりする局面がある。高橋（2016）参照。

13　理論的には、逆であるかもしれない。参加者間の関係性が対等であるからこそ、視点移動が可能となる、ということだ。ここでは実践における経験をそのまま記述しておき、哲学対話の場における対等性については稿を改めて検討する。

14　実際、オスカルの哲学対話について、高橋・本間（2018: 30）は、自身はおもしろく感じたとしながらも、「…肝心の話しあいを始めないまま、入り口のところで時間を潰してしまったと感じるひとがほとんどだろう」と懸念している。

15　高橋・本間（2018: 262）によれば、海外のコミュニティベースのP4C実践者は、「発言の量や形式よりも、それぞれの人の表情や身体の反応、声色、姿勢などから、それぞれの参加者の能動的な関わりや参加があるかどうかに気を配って」（2018: 262）、「参加者たちとともに「関わりたい、話したい」という動機に支えられる場をつくりだす」（2018: 263）と述べている。詳しい分析は稿を改めるが、ここで彼女らの言う「気を配って」とは、本論で言う「単に関心を払っている」状態を越え、自らの側も「表情や身体の反応、声色、姿勢など」による問いかけを行っているものと筆者は捉えている。今後より精緻に検討を加えたい。

16　考察の際には哲学史的反省のうえで哲学対話を実践しようとする海外の哲学プラクティショナー達の論考も、参照できるだろう。たとえばラービ（2006: 264）は、哲学カウンセラーになり得る若い哲学者達への教育テキストの大多数が、男性的視点によって書かれたものであると指摘している。またFeary（2003）は、哲学が歴史的に男性支配的な学であったことから、Feminist Philosophical Counselingという立場を打ち出している。さらにMoors（2015）は、哲学カウンセリングが相互関係性や他者への共感的態度等を重視する姿勢をとることで、「哲学」のバランス取りができるのではないかと述べている。

17　こうした観点からも、たとえば既に「女性の」と冠をつける哲学カフェのニーズがうまれていることについて、真摯に考察されるべきだろう。たとえば、とよなか国際交流センターや東京ウィメンズセンター等において、「女性のための哲学カフェ」の開催が確認できる。

18　たとえば「場が継続的に設けられる」という設定自体、工夫の一つであると言えるだろう。また対話の場自体が、大きな「支援」という枠組みのなかに設置されている場合には、「対話の場」以外の様々な外部構造が、発言しない人へのケアを保証してもいる。また、こうした場には、グループに援助職等その問題に関する専門性をもった者、あるいは問題について「先行くもの」であるピアスタッフが、ファシリテーターとして参加することも多い。ファシリテーターの役割の濃淡はグループにより大きく異なるものだが、ファシリテーターの専門性がケアに直接的に関わることも多い。たとえば村上（2016: 263）は、虐待渦中にある親の回復プログラム（グループプログラム）MY TREEの3人のファシリテーターについて、以下のように述べている。

> 毎回のセッションのために綿密な準備と事後の振り返りが行われる […] ファシリテーターがどのタイミングを掴んで何を語るのかは、場の安全を確保するためにも極めて重要である。語り手にとって危険な瞬間であるかもしれないと同時に、今この瞬間に切り込まなくては参加者は動かないという瞬間でもあり、かつ一人の語りを他のメンバーのリズムへと架橋するような開かれた言葉をかけるのもファシリテーターの役目である。語りの場を整え、開き、維持することがファシリテーターの機能である。[…]

19　たとえば、当事者のための対話の場の主眼はもっぱら、「人と共にいたり語ったりすること」を通じての「回復や変化」にあるが、哲学対話では、「人と共にいることや語ること」（だけ）でなく、「人と共に考えること」を重視するところにこそ特色がある。哲学対話が「回復や変化」を目的とするかどうかについては、議論が分かれるところである。

なお本稿では取りあげなかった「哲学カウンセリング」は、「カウンセリング」という文脈上、ほかの哲学対話実践よりもいっそう「回復や変化」が期待されがちな位置にある。だが、ラービ（2007）のまとめたところによれば、哲学カウンセリングでも「回復や変化」は、副次的な効果として認められど、目的とは言い難い。あくまで哲学対話の目的は、人と共に哲学する点にあるとされている。

20　もちろん、安易に読み替えることができるわけではない。犯罪・非行臨床には治療教育という文脈があり、また実践者には高い専門性をもつことが求められる。哲学対話の主催や進行には、2018年現在、原則的になんらの「資格」も必要とされず、特別な訓練や専門性の必要性の有無については、いまだ議論の円熟も見ていない。

本論では、射程を超えることから「哲学対話」を「治療（教育）」とどの程度関連させて考えられるかの論考を加えられておらず、ここではあくまで参照の可能性をもつものとして提示するに留める。

参照文献

会沢久仁子
2001「魂のための医療――フィアリーによる、がん患者との哲学カウンセリング」、『臨床哲学のメチエ』9: 11-16。

綾屋紗月
2012『前略、離婚を決めました』イースト・プレス。

五十嵐沙千子
2016「対話である越境――オープンダイアローグ、討議倫理、あるいは哲学カフェの可能性

をめぐって」、筑波大学人文社会科学研究科哲学・思想専攻『哲学・思想論集』42: 42-64。

石田靖彦
2017 「各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因――大学生を対象にした回想法による検討」『愛知教育大学教育臨床総合センター紀要』7: 17-23。

榎井縁・金和永・井筒怜
2014 「榎井縁さんインタビュー――居場所は場所ではない」『臨床哲学のメチエ』21: 26-39。

大北全俊
2000 「「言葉」を行うこと」『臨床哲学のメチエ』7: 52-53。

荻上チキ・内田良編
2018 『ブラック校則――理不尽な苦しみの現実』東洋館出版社。

梶谷真司
2018 「哲学教育ワークショップ「哲学対話と哲学研究」報告」、日本哲学会『哲学』69: 119-120。

加藤ジオランデル・青柳宏
2015 「ケアとしての対話――哲学カフェの実践から考える」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』1: 155-166。

カフェフィロ編
2014 『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会。

川辺洋平
2018 『自信をもてる子が育つ こども哲学――“考える力”を自然に引き出す』ワニブックス。

熊谷謙介
2012 「踊る女の両義性――ロイ・フラー『サロメ』を中心に」、笠間千浪編『〈悪女〉と〈良女〉の身体表象』pp. 71-95、青弓社。

熊谷晋一郎編
2017 『臨床心理学　増刊第9号――みんなの当事者研究』金剛出版。

桑原英之
2000 「街角の哲学――臨床哲学カフェ &バー報告」『臨床哲学のメチエ』7: 56-57。

鈴木晶
2012 「19世紀のバレエ」、鈴木晶編『バレエとダンスの歴史――欧米劇場舞踏史』pp. 45-70、平凡社。

鈴木翔
2010 「「スクールカースト」とは何か？――首都圏の公立中学生を対象とした質問紙調査の分析から（III-1部会 教育病理,研究発表III、一般研究報告）」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』62: 196-197。

ソーテ、マルク
1996 『ソクラテスのカフェ』堀内ゆかり訳、紀伊國屋書店。

高橋綾
2016 「折々の人――哲学の臨床のあり方を学ぶ（1）ヴィクトリア・チェルネンコ」『philosophers』1: 56-59。
2017 「哲学対話とスピリチュアルケア」『Co＊Design』1: 25-44。

高橋綾・本間直樹
2018 『こどものてつがく――ケアと幸せのための対話』大阪大学出版。

土屋陽介
2018 「「考え、議論する道徳」の哲学的基礎づけ――フロネーシスの教育の観点から」『開智国際大学紀要』17: 41-54。

寺田俊郎
1999 「子どものための哲学・子どもとともにする哲学」『臨床哲学のメチエ』4: 8-13。
2000 「拝啓、ソクラテス者のみなさま」『臨床哲学のメチエ』7: 20-23。

永井玲衣・河野哲也
2018 「地方創生教育としての子どもの哲学――東北被災地における『子どもてつがく探検隊』の教育実践とその総合的な学習への導入可能性」『立教大学教育学科研究年報』61: 27-47。

中岡成文
1999 「第5回哲学プラクティス国際学会に参加して」『臨床哲学のメチエ』4: 4-7。

中川雅道
2016 「何に抗して語るのか」『倫理学研究』46: 15-23。

中村麻里子・角藤比呂志
2015 「対話を通じて問うこと――哲学対話と心理療法の接点から」『東洋英和大学院紀要』11: 31-39。

日本フェミニストカウンセリング研究連絡会自主グループCR研究会
2010 『CRでエンパワーメント――わたしたちの経験から』自主出版、第4版。

ハーテロー、ピーター
2014 「哲学ウォーク」西山渓・渡邉文訳、河野哲也監修『立教大学教育学科研究年報』57: 107-114。

服部俊子
2012 「臨床研究領域に生じる倫理的問題――ネオ・ソクラティック・ダイアローグによる明確化」『Libra : 神戸薬科大学研究論集』13: 65-87。

フェミニストカウンセリング堺
2001 『私を語ることばに出会って――今を生きる女性たちの物語』新水社。

藤岡淳子編

2007 『犯罪・非行の心理学』有斐閣。

フックス、ベル
2017 『ベル・フックスの「フェミニズム理論」――周辺から中心へ』野崎佐和・毛塚翠訳、あけび書房。

堀江剛
1999 「「ともに考える」ための道具―― "Socratic Dialogue" の経験から」『臨床哲学のメチエ』4: 14-18。
2000 「共同的思考の産物と効果――神戸市看護大学でのワークショップから」『臨床哲学のメチエ』7: 24-30。
2017 『ソクラティク・ダイアローグ――対話の哲学に向けて』大阪大学出版会。

本間直樹／ほんまなほ
1999 「思考の現場――哲学プラクティスと臨床哲学」『臨床哲学のメチエ』4: 19-23。
2000 「他者の自己表出を受けとめながら...――アンダース・リンドセットの哲学のプラクティス」『臨床哲学』2: 98-114。
2004 「私がシネフィロについて知っている2、3の事柄」『臨床哲学のメチエ』13: 45-46。
2006A「哲学カフェへようこそ（5）：パリの哲学カフェ事情」、大修館『言語』35（5）：84-87。
2006B「哲学カフェへようこそ（9）：哲学アトリエ（子どもとする哲学・フランス編）」、大修館『言語』35（9）：76-79。
2017 「語る主体になる――語り合いの活動と対話の経験を書くことについて」『臨床哲学』19: 95-110。

本間直樹・中岡成文編
2010 『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会。

松田博幸
2003 「哲学カウンセリングとセルフヘルプ・グループとの関係――哲学カウンセリングをめぐる議論に向けて」『哲学と現代』19: 23-37。

水谷みつる
2018 「哲学カウンセリング・トレーニング体験記――V・チェルネンコ氏と同僚たちとの1年7か月を振り返って」『みんなで考えよう』1: 165-182。

水野信義
2003 「精神療法の立場から見た哲学カウンセリング――ラービ氏の事例を通して」『哲学と現代』19: 38-52。

村上旬平・稲原美苗・竹中菜苗・青木健太・新家一輝・松川綾子・有田憲司・秋山 茂久
2017 「障害者歯科医療における障害のある子どもをもつ親への支援――学際的研究からみえる現象」『日本障害者歯科学会雑誌』38（1）：16-23。

森芳周
2000 「ソクラティク・ダイアローグ（翻訳）」『臨床哲学のメチエ』7: 4-19。

ラービ、ピーター
2006 『哲学カウンセリング――理論と実践』、加藤恒男・松田博幸・岸本晴雄・水野信義訳、法政大学出版局。

鷲田清一
2014 『哲学の使い方』岩波書店。

Feary, Vaughana
2003 Virtue-based feminist philosophical counselling. *Practical Philosophy* (spring 2003): 7-26.

Moors, Marleen
2015 Sexism and gender issues in academic philosophy: Philosophical practice as a balancing act. In Luisa Paula and Peter Raabe (eds.) *Women in philosophical counseling: The anima of thought in action*, pp.233-246. Lexington Books.

高校生による高校生のための哲学カフェ『ありとぷら』
「黙っていていい。（対話のルール）」
https://aritopura-philocafe.localinfo.jp/pages/605218/page_201608221857（2019/1/6アクセス）

とよなか国際交流協会
『哲学カフェ inとよなか国際交流センター――うけとめるってなんだろう？』「発言するもしないも自由です。気軽にご参加ください。」
http://cafephilo.jp/events/event/cafephilo-814/（2019/1/6アクセス）

P4Cjapan
「p4cについて／コンセプト」intellectual safety　安心して対話に参加できること
http://p4c-japan.com/about_concept/（2019/1/6アクセス）

めぐろ哲学カフェ
「発言しなくてもOK！聴いているだけでも考えていただければ大丈夫。」
https://www.facebook.com/tetsugaku.meguro/（2019/1/6アクセス）

Oscar Brenifier
Free books
http://www.pratiques-philosophiques.fr/en/free-books/（2019/1/6アクセス）

Youtube
Oscar Brenifier – Videos
https://www.youtube.com/user/oscarbrenifier3（2019/1/6アクセス）